

平成30年12月6日(木)

「ミラボー橋」アポリネール

(詩集「アルコール」(1913)収録 堀口大學訳)



ミラボー橋の下をセーヌ河が流れ  
われらの恋が流れる  
わたしは思い出す  
悩みのあとには楽しみが来ると

日も暮れよ、鐘も鳴れ  
月日は流れ、わたしは残る

手に手をつなぎ顔と顔を向け合はう  
かうしていると  
われ等の腕の橋の下を  
疲れたまなごしの無窮の時が流れる

日も暮れよ、鐘も鳴れ  
月日は流れ、わたしは残る

流れる水のように恋もまた死んでいく  
恋もまた死んでゆく  
生命ばかりが長く



希望ばかりが大きい

日も暮れよ、鐘も鳴れ  
月日は流れ、わたしは残る

日が去り、月がゆき  
過ぎた時も  
昔の恋も 二度とまた帰って来ない  
ミラボー橋の下をセーヌ河が流れる

日も暮れよ、鐘も鳴れ  
月日は流れ、わたしは残る

セーヌの流れは、パリの人々の心の中にも流れている。もう 30 年以上前の昔、ミラボー橋の下を見つめていると、様々な思いもまた、川の流れと共に流れていくのを実感した。

オルセー美術館やポンピドー美術館やルーブル美術館を巡って疲れた日々のほんのひとときのことであった。森有正のことを考えながら、ミケランジェロの「瀕死の奴隷」を捜し回り、一日を費やした日の夕刻であったと思う。



ミケランジェロで有名なのが、ローマのサン・ピエトロ大聖堂収蔵の大理石彫刻のピエタ像である。生徒諸君もいつの日か自分の目で見たい。